

# 東日本大震災と 避難所運営を経験して

震災当時(2012年3月まで6年間)  
教諭として本校に勤務  
R6年度より副校長として再び勤務

岩手県立大槌高等学校

副校長 伊藤 晃

ptf7-akira-i960@iwate-ed.jp

1

## ○高台にあった本校は 避難所に「なってしまった・・・」

発災直後から、避難者数 約400名+生徒約100名

しかし、  
**本校は指定された避難所ではなかった**

避難所運営のマニュアル、訓練なし

食料や飲料水の備蓄なし

電気、水道等ストップ

地理的にも情報面でも孤立

(地形的にラジオの電波も入らない)

**本日のテーマ：避難所運営とその教訓**

2

## 1 被災状況

### (1) 大槌町

ア 死者・不明者数 = 1,286名 (全人口の8.4%)  
(死者・行方不明者・関連死等含む)

イ 家屋 4,375戸が全半壊 (全家屋の68.2%)

### ウ その他

町役場、病院、駅、など町の中心部は津波とその後の火災により壊滅状態

- ・町長始め、役場幹部は対策本部設営中犠牲に  
⇒行政、医療、福祉分野が全く機能しない

3

## (2) 本校の被災状況

○生徒の状況 (当時の在籍数は320名弱)

ア 死者・不明者…6名 (2年1名、3年5名)

イ 家族の死亡または不明者のいる生徒数…37名  
うち両親とも亡くなった者：3名  
父または母が亡くなった者：11名

### ウ 住まいの状況

全壊または居住不可 154名  
一部被害を含めると 183名

エ 保護者の失職等 106名

4

- 才 被災生徒数・・・209名
- 力 避難所で生活していた生徒数（2011年6月末）  
・・・51名（1年14名、2年19名、3年18名）
- キ 転学者数・・・17名      そのうち県外4名
- ク 就職内定取消・・・5名、採用延期4名
- ケ 進学断念・・・7名(2010年度末)

○職員の状況

ア 死者・不明者      なし

イ 住まい

34名中21名の自宅、住宅、アパートが被災

5

2 当日の状況（時系列で）



6

2011年3月11日（金）  
14:46 M9.0の大地震発生



地震発生後、中庭に避難



15:20頃 大津波襲来  
(高さ約15m)



地理的に孤立  
状況も不明、寒さの中 約500人の避難者

7

### 3 避難所としての動き

高校の教職員が避難所を  
運営しなければならない状況



目の前の課題として

- ①寒さをしのぐこと
- ②トイレを使えるようにすること  
(水を流せなかった)
- ③食料をどう確保するか  
→そのためも、  
避難者の人数の把握

8

## 課題の解決のために

- ① 布団、毛布の運搬と配布・・・合宿施設から体育館へ
- ② 暗幕・カーテン、段ボール配布
- ③ ローソクの配置
- ④ トイレ用水の「バケツリレー」  
(プールから2つの体育館のトイレへ)
- ⑤ トイレ周辺の清掃
- ⑥ 名簿の作成 (全て手書き)

→**教職員と生徒たちでの運営開始**

9

## 翌日以降も**生徒たちが活躍**

- ⑦ 炊き出しの手伝い、食事の配膳と食器洗い (冷たい水での作業)
- ⑧ 物資運搬、仕分け、配給の手伝い
- ⑨ キッズルームの手伝い(子どもの遊び相手)



雪がちらつく中、食事を摂る子どもたち。食器は水で洗って次の人たちに回した

10

3月12日

早朝、自衛隊により西側道路開通

⇒以降続々と安否確認のために人々が訪れる

- ・交通整理、新たな避難者の受け入れ、食料の確保⇒少しずつ食料の支援
- ・深夜、体調不良の高齢者を盛岡へ搬送⇒名簿

3月13日

遠野市に食料買い出し（←自力で食糧確保）

- ・避難者さらに増加（700名程度）

3月14日

東北電力発電車(通常電力は16日～)やDMAT到着

3月17日

支援物資大量に到着、生徒の安否確認(6名の不明)

3月18日

携帯電話使用可能に(混線し通話ままならず)

3月20日

校舎内に避難者移動（第一体育館は物資倉庫に）

11

## 教員と生徒により、 全くの「手探り」による避難所運営

…最大 1,000名近い避難者4月中旬までの約1ヶ月)

避難生活のなかで混乱はもちろん見られた

生徒達が一生懸命作業に取り組む姿



避難している町民に  
勇気と希望、秩序を与えた

12

**視察に来た  
岩手県知事という言葉  
「生徒諸君は凄い。  
君たちは最高だ！」**

**(3月17日二体体育館にて)**



**避難していた町民の皆様  
から大きな大きな拍手・・・！**

13

#### **4 支援について**

##### **(1) 物的支援**

- ・ 3 / 12朝から少しずつ食糧支援 →自衛隊、内陸の市町村等
- ・ 炊き出しは3/12から・・・近隣の住民から米等の提供  
→やがて支援物資を活用
- ・ 毛布や食料、燃料等 ……一週間経過した頃から増加

##### **(2) 人的支援**

- ・ 県教委派遣の県内教員による支援チーム・・・主に物資の仕分け  
3月19日の第1陣から4月9日の第7陣まで延べ40名
- ・ 医療チーム  
大槌病院、DMAT、AMDA、赤十字、他県の医療チーム  
保健師チーム、世界の医療団心のケアチームなど
- ・ 警察（神奈川、北海道、大阪）

14

## 5 学校再開

始業式 2011年4月20日

入学式 2011年4月22日 ……学校生活本格スタート

- ・避難所は行政と避難者の自治組織が運営するようになった
- ・学校再開後も避難所及び様々な機関が学校内に残る



**2011年8月7日 避難所閉鎖**

9月19日 中学校撤収

12月21日 銀行撤収

※年内にほぼ全ての機関が撤収

15

## 6 大震災・避難所運営の経験を通して

### ①訓練の在り方について

○訓練通りできたこともある

=直後に集合し生徒の安全を確認すること

×保護者への引き渡しと自宅に帰すことについて、**マニュアルの不備**

×家に居るときの訓練が不足していた

=家族の避難・救助、避難ルートの確認

×過去の災害が伝承されていなかった = 訓練をしても真剣になれない

**マニュアルの整備 = 想定し常に見直しておく**

16



②災害時には、学校は避難所になり得る

- ・「避難所を運営する訓練」も必要か
- ・食料、飲料水、毛布、発電機等の寝具、医薬品等の備蓄が必要。

(入学時に保存食購入⇒卒業時、「返却」)

③災害後は、職員及び生徒の心のケアが重要

- ・スタッフの一員として元気に活動しているように見えても、休息させる (生徒を「使う」ことの是非)
- ・日常の観察、定期的な健康調査の実施とその結果に基づく専門家によるケアが必要

17

④震災記録の保存、情報の伝達と発信

- ・震災を忘れないように、地域に、全国に発信していく

⑤町内にある唯一の高校としての役割

- ・地域に希望や元気を発信できるような活気ある学校に  
⇒日常の生徒指導

→学校は「命を預かっている」場である  
危機意識を常に持たなければならない

18

## 7 最後に

「災害は忘れた頃にやってくる」

→伝承することの大切さ

- ・各地の石碑、言い伝え
- ・映像、写真等記録を残す活動

本校の  
復興研究会



「早く忘りたい」「前に進もう」

→日常を取り戻したい

当時の記憶が残る  
生徒への配慮

- ・被災した建物の保存の是非 等
- ・フラッシュバックなど精神的ケア

19

■今年度（R6年度）から「地域探究科」  
1学年対象に「震災学習」を開始

○学校として震災の実相を学ぶ機会を提供

→地域を理解する → 探究活動につながる

大槌町と  
他の被災地を比較

社会の課題を知ることが  
探究を深める

10/31（木）

岩手県陸前高田市、宮城県南三陸町、  
宮城県石巻市（旧大川小学校）を訪問

20

## ○訪問までの事前学習

- ① 当時の新聞記事や震災に関する資料などをまとめた冊子を用いて知見を深める
- ② 大川小学校に関する調べ学習&プレゼン発表
- ③ 「釜石の出来事（釜石の奇跡）」を経験された方の講話
- ④ 震災当時教員として勤務していた現大槌高校副校長の講話
- ⑤ 震災で父親を亡くした現大槌高校教諭の講話

### ☆その他

- ・ 定点観測や探究活動での活動
- ・ 当日バスの車内で地理的要因の解説

21

## ○訪問当日…目的：震災及び伝承への向き合い方を考える

- ① 高田松原津波復興祈念公園、  
気仙中学校（旧気仙中学校校舎）  
…資料館、「奇跡の一本松」等見学後、川のすぐそばの旧気仙中学校訪問
- ② 南三陸町震災復興祈念公園  
(旧防災対策庁舎、南三陸さんさん商店街)  
…大槌町と地形的に類似する南三陸町
- ③ 石巻市震災遺構大川小学校  
…児童74名と教職員10名が犠牲となった小学校  
遺族でもある佐藤俊郎氏による現地案内、講話  
⇒全員で一日の振り返り（感じたこと、考えたこと）

22

## ○生徒の事後レポートより

私は小学校、中学校と震災に触れる機会は沢山ありました。当時の記憶がない私は正直、こんな大変なことがあったんだ、くらいにしか思えずにいました。でも高校生になった今こうして、大きな被害を受けた場所を実際に見て、話を聞くことで、当時の大変だった思いとか、悲しい、苦しい思いをした人に**共感し、理解することができました。**

これから私たちにできることは、今後災害が起きた時に少しでも被害を少なく、悲しい、苦しい思いをする人を減らせるように自分の身を守るための**準備や、訓練を事前にしっかり行う**ことだと思います。

まずは**自分の身を守ることを考え**自分の身近な人に悲しい思いをさせないようにしたいと思いました。

23

- ・ 伝承・・・**過去**から教訓を得る
- ・ 防災・・・**未来**の出来事に備える

⇒過去や未来という目に見えないものを  
**どうやって身近なものと感じさせるか**

**防災は 想像力 と 思いやり**

被災した方への共感／身近な人を大事に思う

普段から（=**現在**）自分の命と、他者の命  
どちらも大切にする態度を養う教育

**= 防災教育につながる**

24